Centimetres
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

13
3043
5

美濃舊衣八丈奇談

美濃舊衣八

曲亭編次

曲亭馬琴

3043

へ13 特
3043
5

美濃舊衣八丈綺談 巻之五

東都 曲亭馬琴編演

浦賀近江山 大津

艮為山

あゝこの駒ノ下

却説岐義八名ゝごと母親間柴と伴ひて次の日羽栗の郡なる復塚へ還る。

宿をづゝ元白屋の門をや近くゝりしゝ。濁水へ癒く出迎く。馬の紆縄を牽

まで。欲ぶと限つゝ。ゝ。ゝまちのゝ。ゝでゝゝ。ゝとけゝとゝのゝざりけるゝ。

ゝゝゝと還ゝゝゝひ。と管待態も正首ゝ。覓の水紙流ゝかけゝ嫉とは岐義ふ

足を洗せゝひづゝ駄荷紙とゝ入ゝゝ。凜ゝゝ汲ゝ出ゝ茶ゝ煎ゝゝゝゝゝゝ

今下ゝゝのゝゝゝませどゝ岐義八お駒と伴ふゝ。走ゝゝゝとゝゝひゝその存ゝゝ瀬

語ゝゝ腰ゝゝゝゝ。尖ひゝけてもゝゝゝゝ。當下間柴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

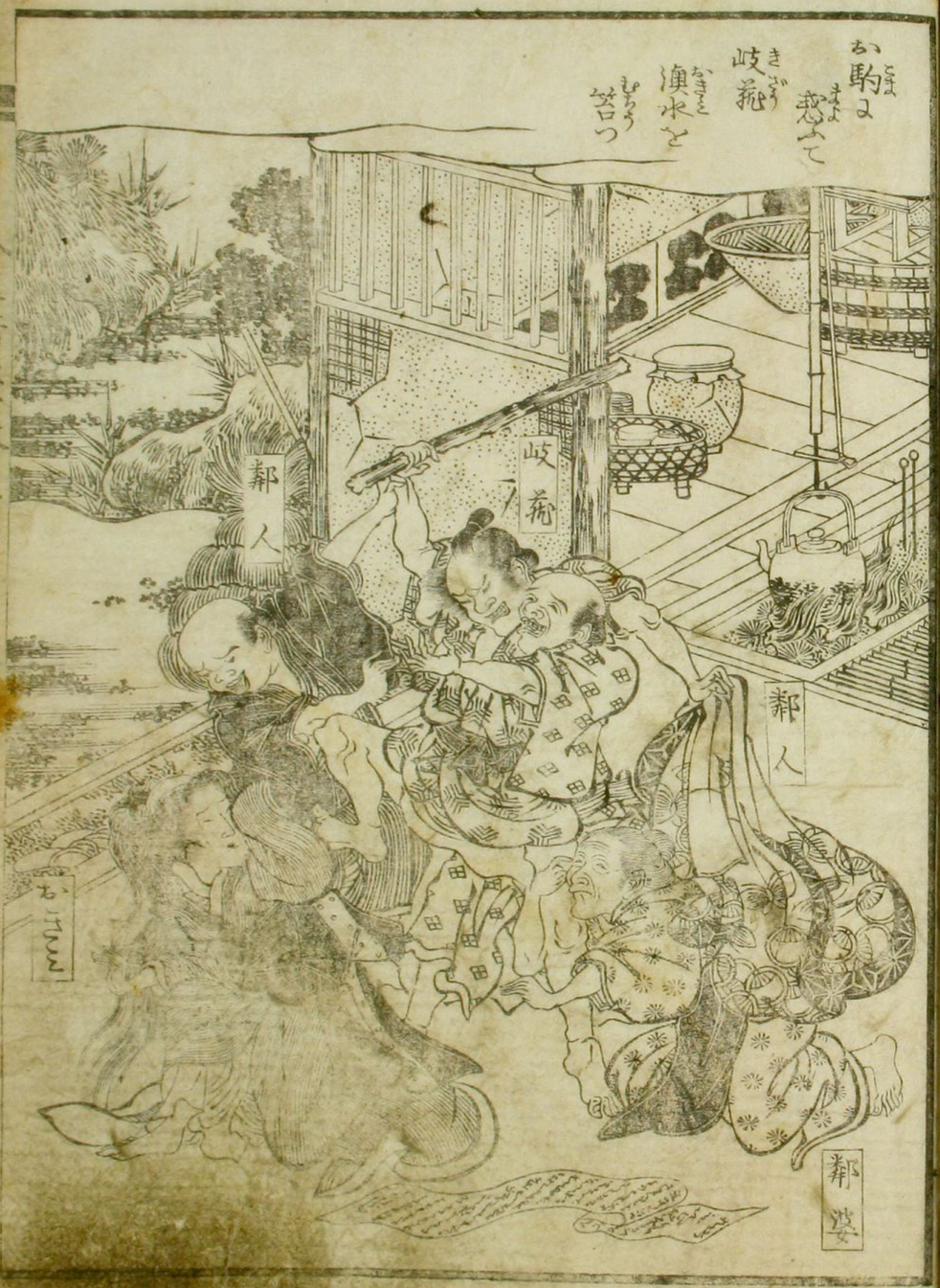
徑易ゝ。岐義をゝ得てゝゝゝゝ白木屋の首屋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まろ君よ。近邸さ荘客ども聚ひ来く。岐義が里がうを視でうが母親間柴折
るそ。忽地ふらふう。曝ま岐義が白木屋式ぞ[illegible]の情由ありぬぐき
るえ。ところ式りめくうんるとび主朋輩の貝式竊こて。稲井赤坂の愧儡女ま岐義
さとつ暁ぞやあるうん。ことを又そうぐ巳渠ふうぐ家ふうてとるる野ごろの
失ぞとあらぶ親がひとるる式劬労とて。結句人まい矣ま。るん翌ともまで今
霄只濵水とをとろまるとる式いとこれまを足械ゑ。とひむとんま決めつ。
荘客ごうが固ゆ。茶式喝る窓のるとろ。岐義と濵水をるふうつ又
あうくあうく濵水が親の遺言式従ゑ。汝達今霄婚姻の盃式ぞうとて。
後ゑまでのるまさま。叮嚀まひ喻ぞ荘客ども。笑て岐義が回答式ゑも
まるぞそ式一度のるふけそ。ろうをけ六日子へまう。世ま差るく在ぞとるうう。
人ま伝といるまてる。古式るぐゑの雑魚平が蹟ぞ固るるるまぞさる儲へはぞと

あま蓬莱の松へ門まあり。常世の竹へ背門まあり。盃のくが山海式珍味まほて
るる不愛さう。吾倩媒妁つまるうん。鋤四郎へ曲突を焼け。抜太郎へ囲屋走ぞ。
序ま豆腐ぞ立ぐるる。寔ま千秋萬歳の千宮式王子ぞふあり。ぞ宮式
竟の殻ぞ。ぞうち載るを選ぶく。庖厨のる式助ぐうぶ岐義へ推薦ぞ。
ぞく。濵水へ式ぐへうさるま何ぞるを胡乱ぞ散動ま移ぞく日式暮
せぶ。荘客ぞう執持つ婚姻をとうう締ぶく。まぐ新夫婦式外房へ言問る
まぐ酔式盡ぶく。兼ぶうぞ共ぶうぞ。かくま用柴ぞ子ぞうち式
整ぶく。十七年の患難劬労を昔ぐうとなるまぐま。重荷式ぞ
地ぶう。豫てうるる式人の為ま。坂東三十余小所ぞうる親世音の霊場ぞ本
志願あり。特ま今茲へ復市が十あまり七回の霜日ぞ。むぐぶうぞ
跡止ぞぐ。拾ひ一金乃半ぞく。田質を大ぐ清復せぶ。ぞまかる限を

ゑ。西三年来は世は浪風を静まりく。ようゝ伴侶をあるゝまとべと。
信かひしくゝ随ふ。聽く律乃藤式岐義澳水ホよ視ゝし。猛よ絵ゝ
禪衣ゝと行装を整つ。同郷鄰里乃老夫婆こホとうちつれ立て首途
せり。さる程よ岐義は便宜を失ひくゝ已と式沙ど八重葎。繁るゝ宿へ入
ゝ。澳水を妻ホ〜〜ゝとどゝとゝ。
まゝど。丈八が取ゝしゝる。お駒が艶簡と八丈の袿と紀念と壁よ貼屏風よ
かけくうちゝ瞻め。世ゝゝ罕なる宝といふ燕の子安貝ゝゝと龍ゝ腦の玉ゝゝを
沼ぐゝ式ゝゝの玉章なり。ゝんとびゝゝくべなんゝゝ式春蚓秋蛇のゝゝゝ書つく
遍ゝんゝを目がとせどゝゝひ深ゝゝる黄絹の衣乃摸様の蝶ゝゝゝゝと花ゝ見
枝ゝゝ宿ゝゝゝめ式ゝゝゝ過世のゝゝゝけゝゝゝ小町式ゝゝて隣女を使ひ。
伽羅と擲ゝく糞土式抓む。ゝの抓ゝのひゝゝゝゝゝゝ愁矢ぬゝゝゝ

香のゝゝゝゝゝゝゝゝ絆ゝゝゝゝ壌臭く日南臭き。澳水が面ゝゝ見ゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝ



肩腰の嫌ひなく。折倒さを蹂躙らく。日毎の呵責は四鄰を騒がしいと苦しき
をものく妻ゝ。さらを漬水に仿うく。折るく隨ひ手ハだ。有一日良人は對ひて
おゝ。嫌なとこゝろつくをとゝより外は里もなく。然てゆくべき家もあ
富縁さ。なん月は我おりいとる。悪縁といふはせん。後世どうとて稱さうゝ。云
号らをとあふとを閔の小川の親方は。勤て在せゝとの年来迷ふ思ひ惑ひ。異
妻のあるゝ〜べよりや世間の命でを左まを右わを能托ゝ。さてゆくべきふ
稱ねゝとゝ我ゝゝ衣のゝとゝ人自へなる妻ゆゝ。その夜だろうのうを情果も
うゞれの霧の海。ゝひ沈ゝくとく死移しといらぬだろうは打罵ゝ。能ますで強
顔き夫でを夫とゝへ憎ゝとゝ我ゝ死ぬかゝゝ目ゆを家宿は掛ゝ
本ゝるとゝ。南宮山の神有ゝ。ゝゝゝるゝは巻ゝ〜。ゝゝゝゝ情田である。
艶間ゝふゝゝ水蓋の深紅ゝゝ黄涙の衣ハ主ゝゝゝゝゝゝゝゝ

姫ゝていふこゝあらんどいふる日ゝうのゝとゝゆく田ゝ畑ゝ秋の終て
多ゝ実ゝどゝ居つゝ食ゝび山を竭ゝえ豫ゝ者ゝとゝび柵ゝとなりて毋ゝ紙留ゝめゝど。
棚ゝの〜毋の楫ゝうゝを取ゝゝ紙良人の機嫌かゝる嶋ゝ紙方ハゝゝゝ
苦ゝ〜ゝ紙孫家の名乃家ゝだゝりゝを哀ゝとゝおゝがゝゝどゝや。外〜ゝゝゝ書東ゝ喪び
易ゝゝるゝとゝゝゝゝぬ夫の紙精ゝゝゝゝ化〜野上の宿花君路の柳ゝ清ゝ
折ゝる人ゝゝ靡ゝどゝ松乃樣ゝゝゝぞゝゝゝぬゝゝゝゝ偽ゝの艶姿ゝ蕩ゝゝ
傾ゝく奈ゝ楊井の傀儡を醒てゝ悔〜きめゝどゝゝゝ紙の乃奥の
為ゝ刃の為ゝ意の駒を殺ゝゝ駐ゝく只名ゝだゝりゝゝゝ女房ゝゝゝゝ
房の若ゝ紙胄を休めてゝゝ鄙の田舎の装ゝゝゝ。釜柄ゝゝゝ
ゝゝ新綿の糸縁ゝゝゝ草野掙ゝ結髪をゝゝゝ紅粉ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ神と親ゝゝ結びてゝ。妹伎ゝゝの世のゝゝゝゝゝゝゝ

仕くるめ式。とうれ口濁く。言葉も滅頭をとく。松はまぐ豆の如くに
袂も腸を絞るだろ水泣とうろ。寔は涙言耳は連ひ長せ涙ぶ
こと式仕ひあくと。唾えしく眼を瞬とぶ。ぐ
でも家へ泣ぶ親の蹟。些の痩田と山及ひ。指婿とて侮るべ。
布きんや。抑この子簡と何とうんてる。さよとの衣ぐるでて情を問ひ
仇姫ぶ。仇腹立く行ぐこのきぶんる目あとど一字一文引をせど続も
ゆ七孫と寔は泣がいとぐ。宗音の祖師の所天ゆ式ぶとの筆は迷
五條七條の袈裟とうれ。ぶれこの衣を戴げ立地は瘧疾がおつ。ぶ些
移香は類と。件の袖を投被げく。勢ひ猛くそち間は。其孔退ぶ。泣況も
奥水を撲地と蹴返せば。若と叫ぶ式はをえとど御と外面へ出ようさる程は。
奥水へ蘊る拘ぶひは。病細ぶるそぐうくは。今は良くは打罵らをく。ぬ

恨は胸塞ぶ心忽地乱をぶ人を召ぬる應ぶ。式撃て貝式睡ぶ。壁は
對ひく呵とぶ。ぶちを表ぶと数回左右式ぶうて。肩はかりし八丈乃袖を
取く膝は乗。視らの衣は類らべかくまで拉式ぶひ式ぶ。夫の好る京縞式。
いど被てぶんと忙く。榜の舊衣脱捨く。お駒ぶ衣式まとげなく。前は紀あど。
細帯式左り結びは左り褄。小服はとろく。莞爾と笑ぶ。かくまで仇ぶる打拾ぶ式の
ところとろうは強顔き人へ何れゆぞ。見ぶ式ぶ。ぶ噛といと喋きちく
けく。襖障子を推倒。狂ふ乃の素と髪門の柳を秋深く。花花落ぶ乃
爰の世は夢とや。ぶ人現ぶ。外面へ走り出て。往方はぶくどなりゆけり。
却説此村は村尽れぶる。表ぶちかり拉びてしく。その嘆青は涙ぶ
障子襖を踏あして。何れゆぶん。奥水へとぶど。一旦の怒は来して。不美ぶ
ぶることを。ぶてぶうく。ぶ乃ぶ式ぶ。ぶとを。ぶかりく。いと

祝ぐまで。明る比より屋棟より。ぎゃうぎゃう烏と常ならぬ鳥ども。
とぶやうにとびかひ。潮水より外にうれめ。紙ぶの宿命紙。
打撒ぎて。紙陝き女子のごとく。恨より怪ども走り迷ひて。佛殿(ほとけどの)に集ひ。
集ひうる妻うづと。正き家の女児。毋の旅寢の間。
うべいひとくに辞ぶ。とかく用ふ。ぎゃうぎゃうと。肚に同肚に巻く。忽地眉に次の
著ぎく。走り去つ。鄰人に縛の紙告ぎて。八方に部しく。妻の往方を索ぬ。
時に天文十七年秋九月。ぎゃうぎゃうかりぬ。不題に駒ゐ。ゐる七月の比より。ぎゃうひ
うけうの紙急病。とどとやうきていとでしく。ぎゃうきゃうの紙送る。ぎゃうぎゃう三郎と
妻ぎゃうぎゃう。その夜紙仇に曉ぎて。百遍悔千遍悔。どと今更に祀ぎゃう郎に
いく怨ぎて。ぎゃうぎゃう祀もうく妻を娶ぎく。曉しぎゃうの水魚のごとく。出ると紙も入ると紙も。
絶ぎうぎゃうぎゃう紙雑ぎて。色きのふかわるうる紙ぎて紙けふ如此ぎのごとあり。ぎゃう

丈八ぶ。ぎゃうのびぎく。彼紙のぎゃう紙告しぶ。姫きと限ぎすぎるまどぎゃうぎゃうぎゃうぎゃう
あぎゃうぎゃう。面ぶぎゃうぎゃう世ぎゃう存命ぎて。ぎゃうぎゃう紙ぎゃうぎゃうぎゃうぎゃうぎゃうぎゃうぎゃうぎゃう
生憎ぎゃう。病著ぎゃうぎゃうぎゃうぎゃうぎゃうぎゃうぎゃう

秋雨ふり川の水岌いそまさりて。その勢ひ箭のごく。特よ夜川のよりまさりて。縱水涌の
達者なりとも輙くうつぶあくべうをあくぶ。船よ乘らと罵りて。いとぐるを夜
明しそよりしてく五七日。下流遠く海猟をぶを元来この川はその末大野郡よりて。
安八羽栗の三郡へ入るとその一條は川鰭より。尾張堺岐岨川へ漲り落又一條は合渡
より西三條よりて。席田本巣山縣の三郡よ蹄りて。復塚羽栗郡長良縣村
黒野の里以上席田郡よ帶をなり。かゝ昔は水脈も今と異なる山川の水岌まさりて流
れて。石瀬滾を勢ひあるとぶ。お駒が死骸はその夜中よりいとぐ里を推流れ
ん。そをとりおろし衣を絡ん。そをぶ捨ぐてくるを彼此を索る
程よ十月の上浣よりつかくく水落漲は見る。閑川よりいと適なる。合渡川の
とりさの岸よ漂よかる亡骸ありと告ぶ。ものしりめくりしるがさをぶ。渚平ホハ。
その処へ出て。岸よ裏ひくつくるよ投くより。そや日ごろ漲へるよ投

塊を突爛きて。臭氣鼻紙穿のごとぶ。黄疸の涙をかる人大
絹の袖紙よりとぶ絡ふべうをあくぶ。駒よ。殘忍貪慾人よ超る。渚平
なるとぶと良傷の涙不見よる拭あくぶ。小斷ホとりろ共よ彼亡骸を引あげて。
竊よ宿所へ扛りくくるり。次の日棺をとのくる。白木の法輪寺へ葬ヲ。ぶ
渚平ハ女房と小厮お弦ア最長へ女児が目ひいひつるる。やくるとこるるやと問よ。
谷丈八へ目上の痛すくるが駒をゆくやく結果よ。後ととくりよ掲ぶ。更ホ
渚平紙怒りしく。夏を紀さんとする按計あるとて。忽地よとこるとぶ。
ものとぶや。此度の不幸ハとぐく。尾張藩子が仗価よりより謀計とそ
ふ。件の親子ハをを濡さで養女とりくさとてる。怒紙
そのびくよりのあり。さきありのぶさ多なくぶや。と真ハ。ホ告ふ
渚平ハこと紙ぶあへぶ。川のもりひ疾視よ。罵ると限ぶなく。ぶ。ぶ

と敷国ども。流石よりゆれく向ひ。憎まれ散をべれ正しく澄据るれとかまこべ
ゆひなくく目紙送りぬ。案下某生涯復塚なる岐阜はその日女房溺水ゆ
へ紙竟て索ろびく。一下こべ宿所へかつしうども。流石よりひ乗ぐこて
日くまてくこりに兵をとり。孤子棒紙引提蕉火をありてこり。
復塚川を彼此と妻の往方を索るかり川上より堰下を枕水
高く岸紙拂ふく。備ことくく凄じけをべ縋この俗よ
投むとも久しく漂べうをあくをこるんくと
をとりごちく。立くくんとをる折ふ。玄中の
月さ一昇て隈なく照らを水際よ流て浮つ
沈つ流るあり。吐嗟とうんをべ子ろう。衣の
色さくく似くをべ。雑て孤子棒よかけ留め。辛く川原へ引あげて

まづその夜れ色をうるよ。黄疸よ深る色八丈絹の袷紙被しり。原来
溺水ハ嫉妬よ似た恨ど。扨ひくくろうまふ。おのが衣紙脱棄くこの袷紙を
刃を提さう。水よ入るを時を待く。漸剥離くをべ被ふよう色浅まれ紀
るををてけをと更よ憐む白物の。後悔とくよその詮ろををど人の性ハ素善
なり。夫婦の滅顕をく。涙とくもふ子曩紙うちかく。顔よかりこるをを人ハ溺愛を
紀揚く。熟視をべこいつ小溺水りよ。あらどくく。只なんりくさふ日来ろう。
そろをの空のく。瞻さ一たる。主の女兒のお駒なり。ろひげるれをををべ。ハ
驚き一下こべハ怪く。爰うとをこべ現こ紀ろをの人なり。玉の緒ハ絶のハた
ろう。滅心の及人程保難をべ萬よ一ろ。甦生ろのハこもの。吁ふ。ろうこん。
良傷を周章を溺水ろ人よ百倍くく。そうまをとろ逆さるふ抱きろて
肯よ被をべ。をを吐くこと難く。かくてハまろるりやと選くろ。彼ろ。河原でハ

仮の死骸をば宿所へと扛りて還る。骸を地炕のそとりかはさせて、丈夫を
りて煖をば中脘より陽氣復して口の脣あるが如し。原来死るにあらざるを
るれ温るふまでとあるべくもあらざると深念して、ありとある舊夜紙上下ともに
かを絞りて膚をとりてぬるる巣籠る雛と通胃心を竭して勤る程なるこの時
ぐるるに息かをひて春の虫の蠢くごとく。次の日甦生あるべしと岐薙先祖よ
祈りて湯劑白粥何くれとなく。夜よ日よ看病懈らざるかてをお助の勢ふ
ことをつくして枕方をる岐薙をこんなるいてて祈りてすらずを待そこる。
縁由を尋ねば岐薙いとぐるに澳水ぐるに紙委細よ告ぐ。さそいふ。念力い
岩石徹せば主と親の指竹東よ九石の弓を雪ふるるに方と憂よ
堪ぐるに。ことを西名方を投ぬひんいと痛まれ心操れまるるに親方ふ
知りとれ口づくして宣ふ絞謎ることく目ぐ注。ぬるるぬるの底とあるる

るふ人生ぬひ。このるを岐薙せよ。彼るるを岐薙せよ。岐薙く。とるまるるしく。
ることらると通命よ項筋忽地武者戦慄身の中解るふ似ることを敵ふ背と
こんせざり死鳴呼物体なやるるぬるよ主乃女児の出ぬづる。飽きぞ隠供ぬふ
見未曾有の口果報いで賞美せざるべ死と思ふ拗ることを面よ慟ることふ愧て
噯氣ことを漬ぐるんん音絞出さるとるこ匿とるるぐるを穂よあるるきて面目
るるや。大ぐるんよるるることるるさるぐ安でんあるるを臣。今宵るる絞律よて。
逐電せよとるんる月ぐ玉章。丈八をるるくく八丈の袿を贈るるひるる長下へと
返ることそこと。竊よ准侍くくその夜乃暗号を絞よかひなく。これんも方を
律ぐ。部母よ伴ることを田舎人還ることそぐまふ稗き見ることを長。女房濱水絞
拵り著らを母ハ坂東巡礼の行脚の隊よ入佛支長死旅寝よ卧さるるる
とくその夜よ後ることふ小川へ脱ることくるるようなく。ぬる方おいひるる侍も

あらぶるとふく腹のくろまろ女房漢水紙打罵り。日毎の夫婦開淨。播磨
跳く四鄰を鬧せ。擂盆粉こく粉こふ。碎けく紙ちひ自ちなる漢水ち妻ちよ
姫ざうろん。彼八丈の袿紙被く。鶯ち生て往方ちまとどりへ水ちやちつ
らんと。海猟る夜川ち不思議の獲ち。正く恐く夜の色妻ちうんまとべ
おりひきや。悪く紙君ぐ在んとこ。尾紙捨くる紙拾ひ。細魚紙細く
鯛を獲くる。新びい言の葉ち。演るとこと盡くぐ。かくて夜ち日ふ療艱ち
丹精竟ち空くうどち。ぶ家ふく甦生ちふ。歌びいとぐめちまつく。
一生涯の幸紙只この世ち極めくうぐさをあつぬぐ。ねるタる恋く紙春ち
あつくたべと愛くう拝く因果塚。忘れんとちへいとぐちく。忘れぐ紙
刃の因果ちるを只刃の因果を救ふをつ。只。新つく滅ち鬼神も
感應。その導ちあらざりせば海境の骨ちうるふあひぐ紙も。勇ふ端ちく

ちあらん自りく御ぐ隙の風杵紙枕ち葬家の。秋乃弱脚蚊いぶでくとこと。
情郎とりろ共ち。ふくるぐるつぐるるくめ娯くうんをちさまちと自ち仰げる紙
艶治圓ちる月紙糸ふんふひぐける紙のこち紙口視ち。今更ち訪ふ
直と呆ちつ数回嘆息く。原来綽ちる丈八ぶ彼とこちふ紙取視ち。奸謀
ちそおそろしけきちるる才三のゆく贈ちる艶簡と袿紙ちてくちち。
岐路いくちひ迷ひく。稼紙比ちう云ちく。妻ふきいく却紙ちわせ。その
存亡の定ちるくまとふ実意であらんちさそちうちう紙怨ちん。
とふとちくふと女子だちう。世ち罪おりれめふ臣。愚生くちふ憂ぶちん
なる憂ちのちくちなる紙ふ過世さんちひやちる悪業ちふ地ち縁ち
喻さび岐路が忘ひを解んちちひ。ちわど月紙技ひ色ち貴賤ち差別ち
まび。道ちくまとくいちる紙。ちち腹ちくく外ちふあちち孫ち清紙照ちく

よくを人よ。南宮象の王は皇或は蒼蹠の弄とやらんいふものよく似たり。
男児ゴは女子が勢想とる物ゆへ。こゝらゑぶそなることゆ愛こそ。抱ひつるゝ
ゆゝ密の使をさせん為共ゴ走らんとてく誓ひの書ゴ袖紙そえて贈り
みる丈八が欺詭ゴく。こゝらゑぶ意へそなるゴあらざ。是へ初。彼へ初。と説
と紙ゆあへぞ。今ゴ示ふ情ゴ。さぐめへとゆまこゝを尾花刀称ふ勇と
おりゑど。異妻を娶ゴ。め紙怨ゴそえるゆ慕ゴ紙ゴゆへあらん正ゴく
吾倩とゆゑ共ゴ。走らんと誓ひゆひ。筆の迹ゴ示あり。是ゆ多ゴ妻を
棄て。他ゆ渡を入ゴらゞ。不思議ゴ必死を救ひ進ゴらせ。ゴゴ妹使がなるぬ
再会不日とこを宜へ應とを宜へ石亀甲ゆ旅ゴ共小要時ゆ離ゴゆへゴゴ。
命へ人の種物ゆ本復ゴそ報ゴけゆ。貝紙愛ゴく肥ゴちゆゑ。生憎ゴ慰めて。
賠償る紙聽ゴ腹を立ゴゴ。親人親友へ測水が異ゴく選ゴゴけゴゴ。

ゴゴ疲労ゴゴゆゆ。疾を日を外ゴくゆゴゴ。真ゴゆゴゆひゴらく昏日屏
風紙建遠ゴく。絶て御駒を人ゴゆゴゴ。茶餌のゴゴゴ員紙按腰を
捻ゴ。紀居の多抱へ貴人ゴ傳く如く。朝夕の配膳へ神明ゴ齋く如く。嘆ゴゴゴゴ。
唾壺紙捧剛ゴ登ゴ盥水ゴ備嘘ゴ紙囃ゴ。欠ゴゴ紙慰めゴゴ。御ゴ看病ゴ
自の務ゴゴ。ゴゴ女子ゴのゴゴ果て。御駒へ推辞ゴゴゴゴゴゴ。
ゴゴゴ。親の居ゴ関川の底ゆ水屑ゴゴゴ。ゴゴ紙ゴ
送ゴゴ。阿容ゴゴく小川の里へゴゴん面ゴ紙所為ゴゴ。ゴゴ自害ゴゴゴ
ゴゴ。政義ゴゴゴ紙離ゴ紙ゴ。ゴゴゴゴゴ。ゴゴゴ。
来世紙ゴゴゴゴ才三のゴゴ艶妖ゴゴ。妻ゴ娶ゴ眺ゴく。楽ゴく月日ゴゴゴ。
ゴゴゴゴゴゴ黄泉ゴく。俟ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ。ゴゴゴゴ。
ゴゴ過世の業因ゴく。神の結び〳〵真の縁ゴゴゴゴゴゴゴゴ再生ゴ恩

値偶の誠仇と受るべ人なあらざるかくまでとろろ弦ろうしぬ。岐蔵がうと合不便。
とやせます。かくやせます。と決く行くくく王昭君が胡地と帰げる心地しつ初と嫁ひ。
中ハ疑ひ後ハ情と羈さとろく。只いろとなく牡鹿鳴小孩の食と共ゆくく
墓うく枕とうくべくべ岐蔵ハ不覚と神浮と心蕩けく恍惚と球と弄ぶ
獅子のごく。天蓼と仗る猫児の如く。お駒ぶ自のとうづめ暮くくぷらく人乃
機とろろど。長くすや媚と惹といふ蜻蛉の験欲。あやくくとうとて死夫婦乃情
縁と不顕尾花才供へも駒を諸平よくくせ比ろうなく妻の兄牧村牛之丞
長通と訪とつ。頻と婚縁とのひとこそぶ女児佑駒を迎ろうく才三郎と
妻せろう。素より活駒ハ容止の。儔罕なるのとうとくぶ心ざるいと恰悧父
長通ハ十八郡の主と仕く諸司の長ろう。その弟ハ深窓と艱とこく薪炊の
事と疎うけと。才三郎ぶ妻となりてハ女の童ごと使ひごとく阿義乃

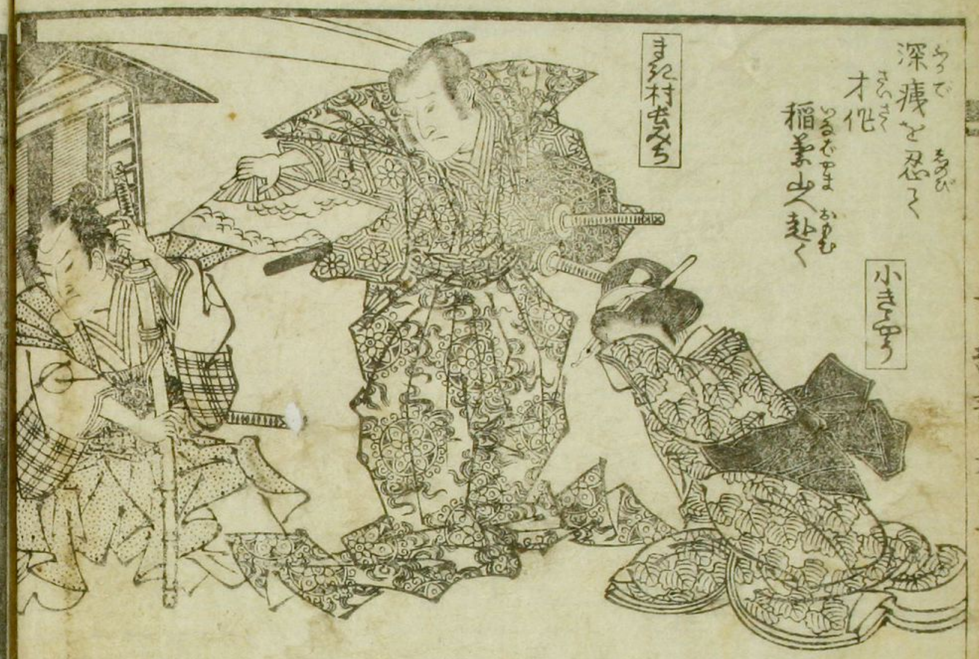
ところ弦知ろうく。その進止正首とこそ弦ろうく才供小桔梗ぶハ渠ハお駒とよ
ろうとこく。憂慈むと大ろうとなろうとこそぶ妹伏の親源と親乃おりへと
一トしわすくく。偕老の契と濃ろ行ろ。かと旦猛と秘とこそ一旬足ろぶ不
暮ろ。凡ぶ駒ハ憂と沼悩ぶ。こく。雲れ小川へ投ろと旦風ゆかくと三ろりしぶ。
尾花親子ハ今天ぶ。その薄命を悼ろう。とこぶ為と楽まぶ。ろのびと流を締と
招ろく。経を読せ。非時と備へ。才ーろ弦ハひ出ろ。ろうぶ袖と濡せろぶ。活
駒ハお駒ぶ心操弦。ろひやりつ慰めろ。ろう行ろ。ろう活ハ稲茶山ろ。
活駒ぶ又牧村長通ぶ使とこく来臨せろ。當下長通ハ後者ぶ申尾ろる。輪
子と。ところ生ろ。尾花親子と憤せろと。旅て客房と入りしぶ小桔梗活駒と
迎ろ。長途と労ひ恙ろと祝ー。才供ハ茶ー。守の命弦清閑ぶ長通歳と勝と
推立和歌不思議と獲ろうとハ稲茶山の硯のろ。時宜とろんくやくとのびぶ。

寺法更に愛させ給ひ。件の硯は當初ちん父道三君に惜まるゝ所の寶なり。守宙の重器風流の奇品にあらずは才次郎とぞ獲てこそ我幸ひ人と共に相応せん。その硯を進ぜよとの詔びに才次郎と才三郎は對面日内縁あるべ汝いかゞ。硯とも小彼小親子と拜ぐ。まよひと仰ぎ奉りて路次いそぎ見今到著あらんと速に見参れ准後紙あらん。言嚴に叙べ才次達ぐ兼て某硯を獲つる此小桔梗ホハ崇紙おそれ或ハ舊の宝へ返せといひ或ハ守へ進ぜよと勸めども崇紙おそれ婦女子の常情故なく守へ敵べ孰ら娼ると云ざるとんと紙ふく默止せ。おそれ家臣なる和殿とりく硯と名ぶと親子が見参紙許さるゝ寔とあるべ紙面目の硯ハ年來書齋に秘置。日々毎に愛翫せざるとぞ。まづ使の展檢に倚べしと奏す。才三郎しく書齋なる。伐戸の鎖紙開く。硯の稜紙とり来れとく。牧村に遍ぜしべ長通ぐづく紛と

釋蓋紙偽に擬遺まつ。服紗を開くに硯ハ見えいるゝと所りく。あらぬ硯ハ推向ぶべ尾花親子ハとの光景に驚き呆れく面紙注。小桔梗活駒の竹然と。そゝもの為なる歎びの果ハ歎きの色ふかく。辞を出さめぞ紙そのゝ才次郎ハ硯の稜紙引ゆく。そゝもとを歎息。物る紙箱とゝゝ。ゝ使ふ毎ゝとのゝ麗忽に似ゝた硯ハ年來秘蔵く。伐戸に鎖と固し女房世松ゝとゝ紙鱗さゝとゝ某ゝゝ。乱びきのゝとゝ紙ゝゝゝ一夜の中に失るゝ申譯ゝ紙厄難ゝ顧ゝに安内知ゝる癖者暗建とゝく硯と盗ゝ鎖錠と舊のゝくゝ表ゝゝゝ。不審とゝゝ慈ひて紙又ゝ。案ゝゝる良人の自紙ゝ。硯く小桔梗と活駒も共に硯の往方に乳紙揭滅ゝゝ墨ゝゝゝ。ゝ紙りゝゝなりぬとゝゝ。ゝゝ遣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ書架書案限ゝ渉獵ゝどかゝゝ才三郎ハゝゝゝ。然ゝゝ紙

捲て。忽地小膝弐撲地と戯れひまつきるとてそあとと云とりどちつく刀と取て。
忙しく外面へ走去んとしてしりとびをいい烈しく喚さわぐ。かを見て孩児不見とて駭
及びて何処へ行し。もし使へ乳へ狼狽しりやと叱さまぶ才三郎へつくと舊の如く
さてさて。こりゃ大人暁するのいさぎよ。此度お駒が狂死のうの。養家弐莫ゆす紀ろて。
そうゆ渚平ゆるくを吾们弐いさく恨ここく。罵ると思ー。と苦慮御後ゆるとあり。
匹夫の素よりの道理は暗ー。亦安内へよく知こり。さてつうの死憤弐散さんとて秘蔵の
硯と盗るめ。遠奴ろつくをーこく抑雑やよりて某彼処へ赴き。守の威徳と藉ありて。
天井の上簀子の下まぐ。捞ま求んとそひひーふ禁のふへとろまぐとりへだ才
仍芸尓と云大こ。そへころる汝が推量のこ正しき證据ろりせば。渚平が硯を盗
むとこと輙くこと弐出さんや。且最余弐ふ弐出さぶ毛を
吹こく無弐求め。世の胡慮なりやー。必驚ぐべくまぐと理の責こる一句は鞭弐。

傍ようちきく長通も涙ながら嘆息ー。失こる硯の往方あれぐへ。ひまつきる縁
坐の織。虚淡と仰のえあぐるふ仍こ。もし外へ脱まぐ。ビ才三郎が後ろの方と
ろふこく吹筆ゼー。硯い却仇とかろ。禍福へ実ま紛ぶ。仍て引ぐ。ビこぐりあてこ
縛を弱果ぐいろまぜほ。と黄忠の額ふあつる扇ろ。用ろね運の小桔梗も活
駒も暁る硯の盗賊大こ。集とおぐ弐よ。ひとろうふ弱ろもや。と問ま養才
仍へ刃と肉りを引抜こ。肚へ下と突こうまぐとまこ。と騒く妻も子を引
ぜ。と左右ろ。携る弐掛ふく声を激ー。女ぐろふとまこくまぐ才三郎が
嗚呼こ。ひろ弐硯の紛失穿鑿の的ありとふこと。縁こ
使をいふぜん愁人と疑ひく。穿鑿ま弐弥ー。竟ふ硯をとり弱ぐ
まこのこなりで。牧村ゆのこまま係ろん。いざ。ん使長通ゆ。才仍が頭弐と
稍ま小の硯ま換縛の逃ぐろふ。仍こあけ。といふ声弱る秋の蟬長くも



あらぬ命令と。友音のそむく母女房のと。禁めう絡くるオ三郎が落る涙を懐中へ。ひぶ推量違つたるこの仇人の猶卑なり。硯もかそとり復。怒氣報ひでやあんえ。死うぞを事の果べ死る早りの物侍る。噛家ある大人幸はこく浅痍をり。ぢころ雄こをくまのべいオ佗眼を睨り。疎ぞりオ三郎。故ちくとりやとく。ことそこめとりところーこ推ん氣浅く肚氣切くんやのざめ清。と小膝紙筆て。雌ぞ(刀と。ちんとまとそ長通急小推禁ん。

いゆくの賢人が獲ぐる死作氣指のせぶ。仁心氣のく宝をせり。世ぐる稀なる硯を人の命ままとめるかはそのの偷見。推量小違つたるこの一旦小虚禁なあいとを恩免の日ぞうとやあ心ーを死氣いそぐぐくを痺偽ぞうくぎる澄ん。空ーる硯の稲ぞうとをこを氣とを稲美人ぞう。痺し氣ゆのえあげく穿鑿金乃刺月とえん。とあ人ごとその痍てを年腹ぞおぞつ也。金を抱ーを肝要ぞうと。説喩ぞく硯の仕氣引ぞうてうち死。

怪しいかな今までも絶えくなりし硯は平くこの松の内よりあらぬことはいふと洗ふべ
そは実の秋と又子夫婦ふまびの硯は松の内よりあらぬことはいふとて
良しとふるを疑ひ釋ぎりしそぐ中小桔梗は袖にて涙を推拭ひいと淡さ
なる女子の智恵もてこそ行ふ原とこの硯乃出所はいかなる
産山の塚乃鬼午句坊が去り移りといと惜しくる抱と世よくつぐとおもへ
今この硯の失せしこと又自滅させ又硯と見ゆるは塚
犯しく壇紙取り硯紙取りとてこの人怒て今かる出来ることふ
さぞやといふ衆皆疑の解て人々あるこの博して理は暗うぬ
人々亦神の憎しは逼ることふ古人の祇口づくし況ものことあるこの別れ
人は禍鬼のかる歎ひはひとうけど妻の諫を子の諫も沼聾のごとくなる
あふことや過世の悪業犯せし塚の名の負く強る妻子の因果欲ところぬ

る紙うり返せと妻はさとりるる。子と世姫をとりうるく人を疑ひ。紙を悔歎べ。
才性は紙接左右紙信とふくうて。哪言ばき女だと。千遍悔とその甲斐
あとんや硯紛失せぎりしべ。疾負ぐりとをもん使とのろ共は君所へ来ん木
三郎を見糸の准倣とそやせどやまづ疾紙と刀と抜捨をとり財紙推抗とぶ
潰る血紙左右とり。布ぬく楚と巻ぬくり。長通ことは紙又ぬく。通い尾花氏勇
士は誰もかくしそあらぬ。ふく出ず惑ぎとを散くされ紙をざけぎ八どいふ
とを亦復危。あるで親子をわく来り。君紙練をりく。硯紙舊性愛うつべ
乞國の為家れるふを後やとうん。とそを死をべ紙者うりせべ。故主紙練も思
ヨ紙結ぬ。國やとをけくは忠臣の名は埋ぬ子孫の栄ぬ者の後もいと長し。
時やくとん長通が後者ホとく乞まと。猶近くを裏はべ哽りつく小桔梗と。
治駒が被とる礼服の花田上下花ぞちる。父の古巣へ子をとりろ共は衣紋治く

晴衣裳晴さるゝ袖の露まとよ濡て朽葉の色でまさりて若くなる長
通り稲荷山の祝の杉れ初と結びて小脇に抱き。ゴウ轎子へ才治を扶乗せ
才三郎に父の傷に附そふて。とや喃ぞ。と妻と世婦ぶ。ぞ。あ
離の涙へむ。とかくや弱平の。なりて。ゴウ小出。くあ。ゴウ
ゴウ。いろ。ぞ。ゴウ。ゴウ。ゴウ

あるじの嘗試おそれて
ことまづ斧を縛りあげてのち其彼処へ赴き。矢庭よりあるじ突落して
結果塚の鬼に祭ふて。ちりぬく金銭隈せ。といふと云へば誰も
べ。と言てよきと捷径なりと縛十二分に伎倆なく。懸て斧を身語りでな
大丈夫欺びく。さて良人よいふ。因果塚はその名るくるとざるりめとなる
後どかる伎倆のなり也ぶ女子は竟に清がいうんとしてもはさるぶ
就てこの丈八と俱にあつ死るべき小厮ぶでいるくるる伎倆なくこの死渚
平人疑つぶ。愉くうけ引く。清朝丈八は彼死と脊負せ。一個の小厮は割鞄と
擔せ廻斧五銭ぶく。主後四人は大流尾山ぶ登りるがくてなる因果塚のもろ
近く来ることば渚平は斧もろ共つ。穿の前に跪坐心中の祈ぶ終つ丈
八は脊負せるる八貫目の流をそぶ。坂の中へ投げ落さんとしたる。

後方より進みよろ。流を投入るとなりはしく。渚平は背を見い一當小厮落さんとせ
悟て斧銭碾と跳ぶ。斧は阿ぶ叫びあぶ刃を逆さるるよ穿の千尋の底へ流
落丈八は跳る勢ぶ肩掛し流さんとしてしく。坂の中へ投落。その刃は仰さるる倒
つ。頭銭山石よりくく打しく。忽地に顔砕け。脳あくらとてく丸でぐりさらに渚平は
るる暁らぶ頭に縛て上りさるる。敬き呆れてく術もくぬ小厮を罵て憑つ。
割鞄を絡し麻索銭穿へ自縛おろしく。斧銭枝揚人とる小怪むべ。坂の中
よろ。魔風吹まく。血銭吹あぐると接霧のごく面を衣裳も眼前韓紅な
るるまくぶさしめ渚平を恐怖く。主は先ぶ走りく逃げる小厮は後を追とて
喘ぶ。とふをあくぶその夜さろ。小川の宿所へ走りろ。縊亡殿はるりぬ
とと斧銭坂ろ出さんとて。天明ろ人を傭役とる人食塚の出銭ろ銭貢
丈の足銭出せどと絶てこんろるめなけまに己と銭ぶると丈八ぶ死殿の辞

ゝるゝ。ゝろ爺ぶ匣の底より。彼ホゞ密書紙とうゑ。ゝゝぶ。好淫とうゑ義兵衛で。
平ゝ驚る紀怒をゞを死さるものゝまいゝゞひるゝく。ゝとり氣紙のゝ屋根ゝ。
忽地節ゝゝ瘡いで来ゝゞろくをゝ且ゞゞと遂ゝ愈ゞ。果ゝ癜風ゝゝりゝぶ。
ゝゝをゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ九月晦日の疫の大風西ゝ駆れ伐ゝ推流されて。
幾百金の材木を失ひゝぶ。治業ゝゝり衰ゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝ

攘ふ。念珠の音小怒吳の得脱を庶幾さまどゝ物怪遂に消散げゝ信敬
まさもく病癒つゝかゝて今茲もすでに暮さく同雲寒氣黄昏小尾花門よ
立在く鉢とそゝ行僧あり。小柱板へその声を伝て遠く門よりけふ
う吳人の亡日ゝ為僧宿ゝ為りなん。おうぐくふうぐ家小今宵をのしゆ人孫と
ゆ人をく。吁嗟ゝ官祐けゝ。當下才三郎ゝ行僧ゝ對面。その為体を熟
初ゝ。年ゝ来ゝ。ゝけを。道頼秀ゝ凡ゝ。まづその本貫法名氏
問ゝ行後ゝ。貪道ゝ的心ゝ。東西のゝ幼稚ゝ母を喪ひ父ゝ
別ゝ嫌ゝ養ゝ。患難ゝ。又乃存亡ゝ。當同ゝ呻吟
つ。人の小厨ゝ。ゝ倍せゝ。ゝ故ゝ。
造ゝ。彈弥ゝ事紀ゝ。主の一子命氏隕ゝ。
殺ゝ。ゝ稚ゝ何ゝ走去ゝ投人と

ゝつる折一個の修験者。ゝ推留め。早ゝ可惜命氏ゝ失ひ。汝ゝ主を
主ゝ。即父の仇人ゝ。汝ゝ孝心氏神明佛陀憐ゝ。雙氏ゝ
ゝひゝ。その方ゝ如此ゝ。ゝ。ゝ。

こゝろ賀中式〻くちつく宣よ。汝が勤行既に熟せり。是より永く別れ〻し
ゑ〻人畏に立つて。因を視果式狭じ。有縁のため式済度せよ。今六その時
を待つべし。とく〻といそじあくべ。貪道僅ごうけあり。且年比の高恩式謝
抑こゝ仏六神扶佛扶願〻六ちゝしあく。と叮嚀に請向に師六莞爾とうち笑く。
現況〻くひえこと六美濃の仲山に。金山彦大神ゑ使に成る。孔雀明王
い六南宮房ゑ口詹見こと。曩に汝を救ひ〻ひとその孝心式憐みあく神勅と聞こる
ゆゑ〻守義就に見系せべ。如此さとまうせいで餓別式とゞしまして被物と
ゆつて。とくべ合渡林に。又ゞ墓のゆとり小立つ。西七日読経〻て。叮嚀ゑ菩提を
吊ひ又に彼此を券縁〻く。今この門に食をまゝ必入とて歎ゆゑ。ゆとりこ乃
教〻さゑ。こゝろう〻匿さゞ告ゝとく。長拍ゞこうゑ小桔梗六
小勝式ゝる。耳式側オ三郎いこの怪談式半ゑ信ゞ半ゑ疑ひ知ゆゑ。ゆ式
伝ゑ諫てゆく。諸平ゞ男児枉死せ〻と式逐電ゆゝる小厮ゆゝくと大ゝゑ精ゆれば
卒介ゆゑ汝を問ゞ稲荷山の硯乃ゝ。又才他ゞ自殺のゝゞ活動ゞ病著ゆ動ゞ式
実ゆゝ式ゝくちゆゝくと式告則如持ゞ清ひ〻ゞ的心ゆゝくゝち微ゆ因果柿の
核の中小二茅ゞ生ゆるゞ如し。り囲間の中小入ゝるゝゑ六雑ゝゝ脱ゞ式但疾ゞく
顕るゝ物怪六真の怨ゑ又ゞあゝゝゞ祟ゝゞ式。疑心暗鬼を生ゝゝゝ。ひゝ
招くのゝゞ通夜〻く退治〻くまゝ。こゝろ加持修法式ゝゞ〻く。真偽立立
地ゝゝゝゝと。ゝ程ゝゞ二更の撞鐘ゞゆゝゞ小桔梗六客房ゑ入尊式偖く。
的心ゞ聯〻ゞゝ。その刃六活動ゞ枕方ゝゝあゝゝく看病ゝゝゝ役小オ三郎六活動
病林ゑ難る。便室ゑひとゝゝ。短檠の壁ゑ掛け。孤
燈の下小韜畏式ゝゝゞゝ。この夜ゝゝゝ。読書ゑあゝゞ更闌て宛鬼の来る式
遅〻と候ゝゝべ〻。不顕復塚ゝる。岐義六ゝゝゝゝゝゞゝゝゞゝゝ駒ゝ救ゝて。既ゑゝゝゞ

遂に女房漁水が往方を索ねど世業をなす著でなく虚しく日を送る
一郷の荘客仕儀ざるものをなく憎ざるものをなく
面り出こと絶なれど時々師走の下旬となりて一夕同柴ホクラ来りけ
荘客仕儀つけく某甲が宿所へ呼び入れ漁水が岐義ぐうに絶此彼計
極る外面猛る恩劇しく大山の敵推よせ来く都村を放火と罵声
えく人金東西へ逃迷へ要皆ことく驚きて資材雑具を扛て出ぜ同
慌忙ぐ宿へ汚うへ群ぐ人よ誘引く往方を定めど走りけ
とのとき岐義が推いとなく母親同柴がかうぬと頭よ伸のく胃うち騒ぎ
いくよせまとろふ件の騒動起ましく驚き呆て既よ内房へ入
入とる駒ぐ絶被き背門口よ出て逃るまで駒に乗て走るまで
る牧駒の狼衣ひとつ被くるまま帯とう楚と結びめ黒白のうち

甲夜間よ喘こで走りる。さてこの騒劇を後よ伸のべ大山の軍兵よせ来るに
あらざる彼此の山賊ホかくのごく流言く里人を絶却。さて絶よ紛れて雑具を
奪ひ妍き女の子を掠めとらんと計りて山賊出入迷る絶逐て引剥をる。
只爭の度絶とるぐ。この頃よ岐義出へ途よりくだくの患難と又いく遍も脱れ
つ。お駒が疲労るまで。脊ホ負く。三時が間ホ六七里を。走りまとるとき
走り来て。廿五日の月を出ん。出るんとき比よ。関ぐ示のところ。桃配野
過ることいくたるを商ワまで何処と泊るとこの時一個の小賊松明ふりて
逐来まへ。脱ぐうと呼ん岐義がお駒を先へ走りぐ。暗ぐ
防ぐ殺よ。お駒がまとく。数馬迷ひく。たぐるくを只ひとり。又五七町
らんとるよ月魄斜よ昇ずふ。浩然よ。凝然と足音しく。いとを頻しく
遂よ。原来脱ぬ所。とるよ胃のく躍まつ。走りんとるふ足い

進すぞ。こころまもく忙るゆぞ。そのうの近く逐蒐すく。引とえ。ゑ。
吐嗟と叫びく一丈あまり。ゑ退つ弁式抜とうく
打掛まぶ忽地撞と倒る式。えくをどぞ
逃んとまろぶ。やよ初見と呼ぶ声ハ疑ふ
ぐうをあらぬ岐義。こハそもいかゝと慌忙き。
走うくへりく引紀ぜど岐義ハ馬駒る弁式眉
間へ赤さう打込まく。流るく鮮血泉のごく忽地ゑ
息絶くう。過失とハいひうぐう。既ゑ夫を害せーぐ。脱ぐき道ハ臣。ゆまーや哀
れやと声を限るゆ活まど。そやその甲斐のなうしぐ。自害せぞやとそふ
ゆうう。かくまで罪障深死身の愚ゑ死んとうく。ゆる死をどぶ。そゑ一を甲斐ゑ。
里へいゆ紀く人ゑ告守の法則ゑ仕ぜん。とうひくぜど生情ゑ涙ゑ途式さうあくど。

爰路式たどるとうしつ。里や近くうろまくふとうんまぶ樹藩折繞らしさる。渚
折戸のゆとりゆまるう。裡ゑ燈火の新さーく。人の咳く音ぜーぐ。試ゑ扉を
推さゑ。音もせぐ開式ゆうう。この孤園ゆーて東向ゑる便室あり。縁新式遣
戸二三枚開ゑ式ゆて。障子ゑ人の新ゑうう。こゆてゑぐく
ゆうがやとおゆ人ど端ゑく門難て。屏式燭ゑ彼此を。
熟視く大式ゑ驚きゆる淺ゆう。野干玉のくうき
夜ゑ。ゑとふをあらで走りーぐ。親里を去ろうぬ。
ゑうくんが養親舊の夫の宿所とハそひうけど迷ひ
入ゆ。ぞ恥ーゆ式。障子ゑうゑる人新ハ才三ぬーゆや
とうまうくん仇ーゆ丈ゆ仇枕。ゑう果ーゑる仇ざゑを。
ゑんくきゑるぐ何とせん新護さと面ゑさゑゑ。ゑう騒ぐ胃式ゆ式摘つ。ゑうり

きてんと云つゝ流石よりひ捨ぐて樹立の蔭よ立駐りかゝる夜は
あらざりせば彼奴の面部弘外ゝ
眼障ゝ捨ゝ命ゝ世のそひでよひとゝ
狂ゝ意の駒ゝ裾ゝ襤褸の袴ゝ衣裳ゝ裾ゝ縁起ゝ足掛てゝ
ちらつゝ登る在明の月を背ゝ影ゝ障子のまゝ立在へ曉者の
達の声かゝくとゝく寂莫ゝ才三郎ゝ佶ゝ障子ゝ女の
髮ゝ乱ゝ立ゝ正ゝ駒ゝ宮鬼ゝ狐狸の正ゝ刺留ゝ
あらんで物ゝ壁ゝ掛ゝ蟇紙ゝ打揮ゝ大唱一声障子を
蹴開き飛ゝ駒ゝ右の乳ゝ下ゝ蛭巻逼ゝ
刺ゝ苦と叫びゝ潰る鮮血を洒ゝ倒ゝ棟の棘穂頭あまりて
縫ゝ息ゝ才三郎ゝ飲惑ゝ刺留ゝ蟇紙放ゝ

知識の活断一点違ゝ活駒を惱ゝ妖怪ゝ駒ゝ真の宮鬼ゝ狐狸ゝ
化ゝ疑ひ色ゝ駒ゝ奴ゝ妻ゝ惱ゝ安ゝ
見る者ゝ尖ゝ抜ゝ蟇紙ゝ体ゝ
三のゝ川ゝ投ゝ死ゝ蟇紙ゝ吻ゝ
そのゝ紙今ゝ出ゝ面ゝ正ゝ親ゝ堰ゝ川ゝ早瀬の
水ゝ住ゝ月ゝ復塚ゝ推流ゝ
放ゝ親里ゝ行ゝ情の械ゝ
住居ゝ手ゝ深ゝ妹伎乃悪縁結ゝ合縁ゝ
扶抜ゝ往方定ゝ迷ひ出通宵走る途の艱難遂ゝ引ゝ
文ゝ遂ゝ癖者の間近ゝ迫ゝ粉ゝ蟇紙打ゝ忽地叫若ゝ倒ゝ

音ふかくまぶかき悲哀や仇なりけんと逐電し岐蘭さるぶ弁ふ額式破らるを泣
くとごを金所ゑりけん墓ゑるを見ゆ絶えうと密夫ゑうとを妻といとと思人と
いつよちろいあしと悔ゑりとる夫と密巳。大罪いくぐ脱ゑたるぐ式人
告國の法則る任せんとそひ定めつ。真夜中ゑ。さ〜昇る月小逆ゑれ
来ゆる養父の宿所障子ゑうる人新い飽ゑぐ別を〜才三のぬ。
やと羅科を辱も忘ゑてく密と吾る。縁起い現剣の。夫殺〜乃天罪い裾よ
襟褓の袈衣模様の駒の背ゑ乗ゼ上ゑ。巨刀の鎗の錆とする。眞上乃
首途かくだろう。驛路の鈴の朦裡の夢消ぬい後の悪名式不便とるぼて
一遍の。回向式憑ゑなる。とい辰を顔のるを忽地変ゑ。緯彷ゑう。
オ三郎い忙然を命ゑる。漢式援ゑとゑ。原来ゑ駒いけ。ゑまで。存命て復
塚ゑる。岐蘭とやゑんる対を任。そゑゑを犯ゼ〜罪の。ゑ。今ゑぐ

鎗ゑく。刺留ゑるゑを不便ゑ。といふ声ゆて母い枯枝ゑ。ゑと泣つ走ゑ。紙
燭式揚て縁起ゑう。鮮血ゑ塗ゑてく倒ゑる。お駒式ゑまぶゆゑ。
ゑうゑさといと惜ゑる。返ゑぬ式紙縁返を涙ゑ千切乃。濕ゑ糸。月ゑ蓄ぞ
ゆゑる。浩ゑ樹牆のゑゑ人のけゑひゑく。間柴い岐蘭式肩ゑかけて
縁起ゑく進ゑ入ゑ。尾花ゆゑまゑ。ゑべきを。吾倩い岐蘭ゑ母親ゑ七月の
下浣ゑう長旅ゑく。お駒ゑのゑる式沿ゑ。ゑゑぐゑて立ゑゑて。世渡の
濁水ゑゑゑゑる。岐蘭ゑ正ゑゑゑ。里人ゑ生ゑ式ゆゑ。ゑ人ゑゑ
代頃の騒劇ゑ。宿ゑゑゑゑ。逃ゑゑ。桃配野式ゑゑゑ道次ゑ
蘭ゑ倒ゑる式ゑゑく修治ゑ。徒痩ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
旅て有ゑ引ゑけゑ。人ゑ式ゑゑ。ゑく。ゑる程ゑ。已前ゑう復讐ゑ立在ゑ動機ゑ
今般の言ゑゑゑゑゑく殺ゑ殺ゑ。ゑ。ゑ。ゑ岐蘭い悪ゑ式ゑ夫殺〜

月を責ること揺しそ痛しまと今往方にて定めつゝ岐部まで漁家とりて屋
あり。親方の愛女の少死を嘆くハ[illegible]ことゞも迹臭らしの妹使の相[illegible]人。
いろんハ物体ハ。許しまと亡骸ま。携て著つ泣沈ゞ岐部ハ[illegible]高日のこと
頭を低くこんねこり。折てそあまと白木屋箱平ハ樫の棒を寝こつ樹立の[illegible]
頭を玉ゆを三尾花才三郎。こゞ故主る一角どゝハ汝が父ま間殺せ[illegible]兒
お駒ハ後ま殺さる。彩あゞべとハ[illegible]
世の風声幻ろりとと女児ゞ面報。こ年くゝ[illegible]十日ゝ[illegible]
潜び入り今ろるお駒がまことの枉死罪る怒を說念せよと敦圉猛く罵れば。
オ三郎ハゆのあくゞ。めくしとと刀を把て立向とる幼ま甲斐ま宿匿
行倒的公忽然と立ち。戻へ閉りと念珠式のて。勢ひ悍くこゝ揚る諸平ゞ
棒を打落ゞ撃る死ゞ[illegible]

郎ゞ仇。お駒ゞ仇人彼も此を脱さゞと罵ま[illegible]ひて蹴て落る棒式取ゝんとすとる小
ゞ足動ゞどこまハいろ。と溺る目前へ再び数珠を内くゝ丁ゞ礫と磬居ま打
居え人ハゝゝじとゝゝふゝん和主ゞ両個の刃式殺ゞハ和主ゞ仏の剣ゞ。十七年
さゞ巳ゝ和主合渡の芝生ゆくゝ。こゞ又諜ゞ式殺くゝること。こゞ因果のこゞ[illegible]
その子と云ゝ利乃為ゝ。こまと式家ま使べゝ。こまとゝ[illegible]ゞ掛る罵ゞ作ゞ
子ゝの金式絶くゝ。人力人智の及ゞ。こまゝ[illegible]ゞ天の罰罰昭[illegible]。こまと書報
あるのゝゝゝゝ。岐部ゞ又復市ハ服ゝて獄屋ま分まゝ。丈八ゞ兄様[illegible]
おゝゞゝゝゝて命式隕て。[illegible]ゞ和主ゞ亦ゝゝ[illegible]輪回[illegible]
和主ハこゞ又の後妻ゞ弟ま式ゝ女児ま苦くゝ株[illegible]丈八ま[illegible]
彼ゞ死後ゝゝゝの好淫ま瞰ゝゝゝ剣お駒ま復市。一子岐部ゞ奪れ[illegible]
号て。蓄天尾花生ま殺さまゝゝ。今生の業因のゝ遠く前身ま[illegible]

當初芦月角六が因果塚の鬼を祈る。彼一角を拳しが起う。牧村信乃主従
練る。柏芒寺の再興をぞめしが事ありて。塚の鬼時を
生を拳不破乃郡司が後家谷折の二字紙
引つるぞ則。才口の犬介となる。柏芒寺の悪僧午句坊が女児
駒となりぬ。午と馬が和訓なれば午句の二字紙合せ則こを駒となる。
独孝子木三郎が才三郎を生を拳りさまざまこそあれ木三郎が母と継父を
練る。偷児を打扮て。てろなく親を捕らを。午句坊が邪慳乃刃が石の
脇を落さを。その形紙拳すてく。木の字が衣紙打落てく二郎の上を
冠せをぞ才三郎となるがあらざやこの故を午句坊なる。白木屋が駒が
才三郎紙。墓くどを絞あらざ。谷折の斧が憎をてく且を患苦絶ぞ小
斬岐蔵を犯さをてく。夫を害せ。罪人となるを名生て木三郎なる。才三

郎を殺をてく。亦是前世の悪業なるを。人々念を繋を。壇で聴ぬ甘よ。
むを柏芒寺を。支山林中と。両個の沙弥あり。林中が住持午句坊が
悪紙翼。支山が為く練てく。午句坊乳除くをひく。竊を林中を相潭
つ。支山紙いてく酒を酔てく。睡の中を縊殺さを。機密紙偏をなるを。
支を林中を殺さんとてしるぶ。林中且く戦てく。午句坊を傷を頂を
倒る紙こんてく死なるを。直を逐電ををを。後道路を餓死なる。今
この因を縁をなるく。支山の二字が岐蔵を岐となる。午句坊なるが駒を犯して。
女房輿水紙打罵り。却が駒を額紙破らを忽地を倒きてぶ。お駒が二字紙
死なるを。ひく。支殺の罪人と名告りぬさが林中の一ツの水紙中をなるを。
沖水く支山の岐蔵と午句坊なる。お駒ぶ為を狂死なるが前身が支山を殺
師の悪僧を傷げる。罪悪をなるものなり。さをぞ間柴ぶ拾ひ金原を

因を推
果を説
大團圓
小まさゆう
ちとせ
まさ村さま
ちとせ

的心
才三郎
猪平

諸平が不正の財今とは成りて復市が寃を皆ふよ仏くまでも異意[illegible]
故に成りて恩義ある世婦に喪ふ是禍の水原又この諸平が前身は柏[illegible]
墓する野上の托君柏[illegible]は別に惜と恨[illegible]花[illegible]て伽藍の[illegible]
風[illegible]ごと愛惜の雲霧晴[illegible]ど生を邪慾の諸平不[illegible]り。かくは諸平が[illegible]
塚る。錢を[illegible]くゆ[illegible]。一旦富[illegible]人とな[illegible]
りて[illegible]。柏の一字に分[illegible]は則白木又彼主管大八は前生[illegible]妻各
折を午句坊[illegible]倫[illegible]る白徒不破郡司[illegible]不破の不の字の右の[illegible]
丈とな[illegible]八と破の宮八声相近[illegible]前身[illegible]憑[illegible]夫婦は則好夫と
[illegible]淫婦とな[illegible]因果塚[illegible]自滅せり。[illegible]その初成[illegible]就中各折はその
罪重[illegible]成りて又舊の窓へ屍を返せり。[illegible]の前身は彼柏
で[illegible]は墓[illegible]て歸[illegible]て帰洛[illegible]又隠前国司[illegible]平[illegible]今諸[illegible]と[illegible]成[illegible]平の

名成薄金とな[illegible]。又彼復市と株[illegible]が前身は夏柿珠倉[illegible]成平卿の
老當[illegible]主の成平が柏[illegible]と京洛へ倶せ[illegible]仰[illegible]成手[illegible]練[illegible]苗[illegible]。柏[illegible]
この主後と殊又[illegible]恐[illegible]。[illegible]又[illegible]湾へ[illegible]て諸平[illegible]。
猶夫復市株[illegible]は疑[illegible]く狂死せり。[illegible]件の柏[illegible]が嫌[illegible]る前身[illegible]怨[illegible]
[illegible]。命成[illegible]不隕[illegible]。彼成平主後は[illegible]せる隠[illegible]
いへども。主は食言[illegible]。愛妾[illegible]成[illegible]。家臣は家初[illegible]練[illegible]て。後[illegible]成
阻[illegible]。過失[illegible]て[illegible]のごく。一婦人の怨[illegible]。善[illegible]は必善報[illegible]。悪
[illegible]は必悪報あり。小善成[illegible]大[illegible]善報あり。小悪成[illegible]
悪き報あり。生[illegible]世こくの如し。怨[illegible]
前身の功徳[illegible]才三郎と生変[illegible]地方[illegible]不破郡の目代
お駒成退く。活駒を娶る。是塞翁が馬[illegible]斉[illegible]夫萬物は一馬[illegible]馬の外

る。禍福は故より定まる。善以禍と退け、善以福を迎さり。又何ぞ疑ん。只才化の自殺の。因縁る所なり。仮令ば、こゝを又縁故あり。當初芦角六は因果塚の鬼牧村生を怨しうどを遂さそろはゝ、こゝ
傳つゝこゝを我悪り。是をもつて塚の鬼の崇さろ。才化が因果塚の祈子うる。一角を殺ゆ及び怨地を退はらひて
かくこゝの文墨才化が因果塚の祈子うる。一角を殺ゆ及び怨地を退はらひて
とゝぶ為る因果塚の坎へ落しゝ。みるゝ為の鬼の崇さろ。才化が勇義の健
雄さりしゝぶ。この時いまゞ死よりまゝ。只彼硯を愛せしより。遂に崇ゆ命を隕
せり。尾花は則芒なり。柏の白木を怨我結ぶを。又柏芒寺の因果ゝかくゝいへど。
数百年前死ゝろりめゞ。更に人の胎に宿りゝ。ものゝ生まるゝの理。仏説の
前後身修に所謂并来は必因あり。縁あるゝ為ゝ生るゝ為の類ゝ。吾思ふ我為
づゝ。古人は暗合はゝとあり。孫ゝ駒が生ゝてより。畜我根ゝ前生を
戒を破ゝ。ゆゝ死ゝめゝはゝゝゝゝその堂ゝ。ゝる虫ゝ蜻蛉ゝゝ。ゝ

蜻蛉はあゝゝ。譬ば件の塚の鬼午句坊谷折ゝと今のお駒谷ゝを同根分身
なりゝ。何ぞ。更に因果我源を我ゝ。ゝゝゝゝ暗合ゝゝ如ゝ。かゝゝゝ駒が
亡骸を彼穴へ返し埋ば怨霊とゝる得脱ゝく。永く障りあるべゝゝゝゝ
不思議は三年以来台詣る師の教我受ゝ。如是我聞。静に曾裡乃
月をゝゝゝゝ新ゝく今生後生を照ゝ。這個乃因果件の如ゝ。亦復約と
ゝゝ我いゝべ。

第一　白木渚平が　前身は　美濃尾山柏芒寺閑基女僧柏手
第二　ゝ口渫次が　前身は　美濃前国司在原行平
第三　猟夫復市が　前身は　在原行平卿家臣夏柿某
第四　猟夫株蔵が　前身は　在原行平卿家臣珠倉某
第五　ゝ口斧が　前身は　不破郡司鬼妻谷折

第六　主管丈八が　前身は　不破郡司
第七　小厮岐藏が　前身は　柏芒寺沙弥支山
第八　岐藏が妻澳水が　前身は　柏芒寺沙弥林中
第九　白木屋阿駒が　前身は　柏芒寺悪僧牟句坊
第十　尾花才三郎が　前身は　孝子太二郎

とべくことの十人は十悪の貴主なり。或は餓鬼畜生となり。或は修羅人天を流轉せり。
とまでそこの。汝よ生く汝よ返る。努慎めよと返覆しく叮嚀に説喻せば尾花
親子岐義親子は醉がごく。醉るがごく。もろ共に嗟嘆しく感涙坐に禁めがたし。
當下諸平は圓くる。目玄揭赤めく鼻うちうこ善知識の説法に。あのがごとくの
機伎を洗ま。はじめく覺る二世の悪業をまことに入くに。花やもろ。
恩玄おりてそり復ぜ。女児お駒が今とごく殺さるを天の責撲拭法師

岐義が為ふ。ことを親の仇人なるまで首玄拳げ落しく。孝義ふ俗へてよと
いひつ坐玄組合堂をとべ。的心法衣の袖に玄あらせ。善哉こ懺悔に五逆
十悪を消滅せ。ことまでこそ岐義が為に。和殿い假ふと主なるふ仇ありとて
いつで殺べき。今恩玄ありく怨に。ことを只守に佐のえあげて。命を
ゆるさとべ。そまで玄菩提の種ふ。未世の経管肝要なるに人と説示と折奥の
くよりの。活駒は遠く走り出でとそ玄死出法の声を。彼処に聽ぬ。ことりて病
著忽地おこりぬ。といく声を混回陽の推用がこの折戸口ことりせ
ひぬと牧村長通に呼門せ。右近大夫義龍は後者駆ぬくこてこ入。
ちく出迎る。才三郎は玄くくく。ことまで甲夜に羽栗の農民を劫せ。山賊の
退治の為に。ごとく馬玄出くく。ゆくゆくを伊ぬ盗賊と。彼此にく捜捕しく。
民を喻くくる折。一個の修験者途にあくく。ごと馬を推とど。守出ぬ

ちゝめさぶや。前國司時頼藝の落髮法師よりて的心といふ。今一夜毛花才
三郎が宿所よあり。直よりゆゑ久く對面ちゝめ必國よ福あらんと告るとつまぶ
忽然と形ハ消てうくなりゆゑ縡奇異ゆゑとどと据あり。うちを止へ孔ゆ
うゝ孫。豐ゆく我ひゑくゝ。この門傍よ馳來つ。縡の兹つゝ小仏ゆり。現
この法師の智恵活潑もゝの行基弘法ゆ。ちさゝ岁ゆうをあゝど。旦ゆ
紙角の兄ゝ系也。頼藝朝臣よりく肖ゝ。彼的心ゝやあゝんどゝと國とて
的心礼儀正しく。貪道則時が兒ゝ。ゆゑ母ハそのすゆゑ。頼藝の妾ゆりき。
懐胎ゝ紙のゆ兄弟ゆ農夫諜ゆよ帰ゝ後貪道我産ゝとゆ母さんすゆ
ゆまりゆゑとゆ我ちゝよりゝゆ。台詹師の海よりて不思議よ実の
又とゆ。加之頼藝ハ陸奥よりく卒去せり。遺骨我敬ゆとゆりよび。
迺汝ゆとゝまりとゝ。此度ゆゆ師の賜ゆ白骨ハ改陀袋の裡ゆ納てゆ。

ゆ我ゆゆゝど義龍ハ床几をたゝゆまりく。菊ゝく答礼ゝ時殿ハむゝゝゆ。當國の
守護ゆゝどゝ武運ゆゝく傾死て。子孫流落ゝゆゝと戦國の慣ひ是非よ
及ばど。縡ゆゆ又道三ハ情ゆゝゝ我逐ゆゝと。十八郡ハ彼ゆゝの賜なりゆゝ。
舊恩我仇ゆよびき。今ゆゆ還俗ちゝゆゆ富田の城と進ゆゝど。と叮嚀よ
勸ゆゝ的心ゆ我ゆゝ捧ゝく。時が子孫ハゝゝゝゝ。ゆゝゝゝ意よあゝど。回答ゆひく
ゆゝゝゝ又必起るゆゝゝ。還俗のゆゝゝ。
ゆゝゝゝゝゝゝゝ義龍再て。ちゝゝゝ伽藍と建立ゝ。當郡と坊料ゝ進ゝゝ
いゝ我を受ど。只金山彦の神社頽破の修復と。ゆゝ母ゝ
貫渚平が舊恩我免さゝゝゝる我のゝゝゝ。義龍ゝゝく
ゝゝ我許容ゝ。猛ゝ稲ゝゝの硯を取ゝゝゝゝ。ゝゝ我的心ゝ安ゝ
帰城ちゝゝゝる。ゝゝゝゝ的心ハ件の硯とゝ駄が死骸を尾山の寅ゝ遣ゝ

再び塚式築ゼズ。別ニ墳墓の地を擇ム。頼朝の白骨を埋ミ、三世八代母有縁の亡者の為ニ石塔婆を建立ス。大施餓鬼を興行して、永くその菩提を弔ひ、そ[illegible]先岐義親子ハ出家ス。ク的ハ子ニなりつ。白木屋清[illegible]資財を散ス。貧人を賑ス。市鄙を毀ク。的心の菴室式、[illegible]ク。的ハ式師ニ事る。小癩風頭ニ平愈セり。かゝる奇特ニ。まさく煩悩の垢を洗ひ流シつ。ときく尾花が安不式訪ひ訪ヒ過ぎくるの物語りく。莫逆の友ふぞろひぬ。こゝにてよろくく好事のため堰樋の一巻式、和睦樋と唱ふ。

ときく

編述

曲亭主人稿本

總卷淨書　　千形仲道勝

畫工　北嵩堂宣華

朝倉伊八郎刊

繡像剖劃

○近刻出像圖字小説全本五卷　山青堂閣版

義貞の名氏ハ渡辺橋の由来　馬琴著

袈裟御前七條法語

節婦の終焉ハ鯉塚の縁起

こゝ孫史猿華の秘題向ふ至い来甲戌の冬迄當酉の冬迄

文化十年歳次癸酉

美濃舊

刊行書肆

江戸馬喰町三丁目　若林清兵衛

江戸筋違御門

冬十一月吉日　發兌

素人狂言紋切形　全三冊　馬作　画

古今百馬鹿　全二冊　同作　画

右中形のさし絵甲戌の新物多り當酉の冬ようよ出